

小林多寿子教授 ● 社会調査法Ⅰ

リサーチ力を総合的に磨きあげるために
マインド、センス、リテラシーを培う

「社会調査法Ⅰ」

は、社会調査法に

ついて学生の皆さんが最初に学ぶ科目です。ですから授業では、数量的調査法・質的調査法のいずれにも偏らないように全般的に教えるようにしています。

まず導入では社会調査論についての授業を行います。欧米および近代社会成立時の日本において、どのような社会問題が起こり、どのように解決されていったのか。その歴史的系譜を理解したうえで、実際の社会調査において必要な問題意識——これを「社会へのまなざし」と呼んでいます——から、仮説立て、先行研究の確認、そして実際の社会調査の計画について学んでいきます。

日本における社会調査は、マスコミが行う世論調査、選挙の際の出口調査などいろいろありますが、私が授業で最も紹介する機会が多いのは「国勢調査」です。これは当の学生自身も回答対象となる全数調査で、結果はすべて総務省統計局のホームページを通して公表されます。日本の各種調査のなかでは一番ベーシックで、政策や社会保障などさまざまな観点からとても有用な調査で

あり、最適な教材です。学生にもホームワークとして、「直近のデータから現代日本社会のどんな特徴が読みとれるか」「5年前・10年前の結果と比べて何がわかるか」等について、考えてもらっています。

そして1年間の授業の最後に必ず伝えているのが、「社会調査と倫理」です。社会調査とは、人が人に会って、人について理解するための社会科学的方法といわれます。協力者の人権の尊重、プライバシーの保護、法令の順守の姿勢は欠かせません。また調査結果について、協力者および社会全体への還元が要請されます。これら倫理的側面までもしっかり理解して初めて、社会について自らの問題意識に根差したリサーチ力が身につくのです。

では

「リサーチ力」とは何か。私は学生に、三つの観点から総合的に磨きあげてほしいと伝えています。

第一に、リサーチマインドを養うこと。今自分が生きている社会ではどんな問題が起こっているか。現状をいかにして明らかにするか。状況を改めてリサーチしようという精神、社会へのまなざしを深めようという意志を持つことです。

第二に、リサーチセンスを培うこと。センスとはいわば、調査をする際の「勘」「感覚」のようなものです。さまざまな社会問題のなかで、自分が特に問題意識を感じるものは何か。やみくもに調べるのではなく、フォーカスして調べる。時間や費用などのリソースはつねに限られているわけですから、このセンスを培うことは欠かせません。

第三に、リサーチリテラシーを高めること。平たく言えば「たまされてはいけない」ということです。すでに世のなかにはありとあらゆる社会調査があります。方法・対象・結果などから、その調査が果たして信頼できるものか、有用なものかを自分で判断する力です。特にこの第三点から学生にわかってほしいのは、「社会調査法Ⅰ」の授業が必ずしも「とにかく社会調査をやりなさい」と言っているわけではない、ということ。さまざまな調査および調査結果を適正に判断する目を養い、リテラシーを高めることもとても重要な学びですから。

最後に

社会調査士の資格についてふれたい。社会調査士科目ではB科目に該当します。社会学部らしい資格を取って卒業したい、社会学を学んだ結果を形に残したい。こういった動機で自発的に資格取得を目指す人に対して、応援は惜しみません。実際に応援する体制はしっかり整っていません。ただし資格のために社会調査を行うのではなく、社会調査について学んだ延長線上で、資格取得を目指してほしいですね。(談)